

当世フランス語教育事情

樋口 淳

1. リヨンで考えたこと

1-1. 専修大学留学生との出会い

2008年の秋から2009年の春にかけてリヨン第二大学の東アジア研究所に滞在した。

まず、その時に会った専修大学の3人の留学生について話したい。

リヨンに着いた9月末、すぐに会ったのは文学部のN君と法学部のT君である。二人は3年生で、フランス語は、大学に入ってからはじめた所謂「第二外国語」にすぎない。1年生の3月にフランスのトゥールで行われた短期語学研修に参加し、2年生の6月に学内の選抜試験に合格し、翌年2月末にリヨンにやってきたのだ。

私が彼らに会った時、彼らは、6ヶ月の語学研修を終え、9月から始まった正規授業に出席し始めていた。

二人は、すっかりリヨンの生活になれていて、地下鉄やバスの乗り方、レンタル自転車の借り方などを丁寧に教えてくれた。

リヨンは、ローヌ川とソーヌ川の合流点にあるフランス第二の都市である。周辺も含めると人口160万人といわれるが、中核となる市街地はコンパクトで住みやすい。私は、ユーロ使用がはじまった2002年3月に集中講義のために1ヶ月滞在したが、その後、わずか6年ほどの間に町はすっかり変わっていた。とくに便利になった交通機関の制覇のしかたをN君とT君に教えてもらったのである。

私がN君とT君にあって驚いたことが2つある。1つは、2人がおそろしくよく食べ、かつ飲んだことである。私が住んでいたのは大学から徒歩5分くらいの2DKだが、簡単な台所がついていた。そこで用意できるのはスパゲッティとかカレーライス、それにステーキとサラダ、茹でたエビくらいのものである。夕方7時くらいに始めて11時すぎに食べ終わる頃には、冷蔵庫はすっかり空っぽで、ビールとワインのストックは底をついていた。

私が、もう1つびっくりしたのは、2人がすっかり大学生活にとけこんで、なんの違和感もなく暮らしていたことである。彼らは2人ともサッカーファンで、私のアパートに食事に来るのは、たいていサッカーの練習の後だった。大学の友達とサッカーをして、お腹をすかせてやってくる。サッカー仲間とは、言葉の問題はなにもない。

大学の授業についても同じである。日本では勉強したこともないはずの新しいテーマの授業

に出ているので、私が「ダイジョウブ？」と聞くと、「なにがですか？」と逆に聞き返す。専修大学で2年間勉強し、リヨンで6ヶ月集中授業を受けた程度のフランス語で「そんなに気楽に単位が取れるのか」というのが、私の心配なのだが、彼らはゼンゼン心配していない。

世の中は、変わったものだ。私が実に40年前に23才でベルギーに留学した時は、もっとずっと緊張していた。この違いは、いったい何なんだ？

もちろん、それは「タフな精神と体力をそなえた専修大学の留学生T君とN君」と「脆弱で心配性の私」という個人の能力差の問題だろう。しかし、その一方で、留学生を受け入れる大学の制度が変化したのも事実ではないだろうか。

かつては「フランス語のできないヤツは、フランスの大学に来るな」とっていた人たちが、「多少、言葉の問題があっても、能力とやる気のある学生には、できるだけ単位をあげよう」という顧客志向に変わったのではないか。留学が、とてもカジュアルになってきたのである。事実、N君とT君は、ちゃんと試験に合格し、単位をとり、2月に帰国した。

専修大学3年生としての1年間をリヨンで過ごした2人は、無事に4年生となり、留学中からインターネットで就職活動を開始したT君は、希望した企業の内定を手に入れた。N君は、大学院への進学を目指している。

2月にT君とN君の2人が帰国すると、入れ替わりに法学部のK君がやってきた。K君の語ってくれた留学生活も面白かった。

K君は、帰国したN君やT君と同じ「アリックス」という学生寮に住んでいた。そこはリヨンの丘の上で世界遺産の旧市街の道路ひとつ隔てた向こう側である。寮のなかには、なんとローマ遺跡まである。

この「アリックス」には、家賃100ユーロ(13000円位)の部屋と300ユーロの部屋がある。K君は、100ユーロの方に住んでいた。こちらは家賃が安い分、トイレ、シャワー、キッチンが共同である。この100ユーロに、最近、中国人の留学生が殺到した。住人は、圧倒的に中国人なのである。

そこで困ってしまうのは、彼らが台所を占拠してしまって、気の弱い日本人はなかなか使わせてもらえない。自炊の時間がないのである。それでもK君はがんばって、自炊で通すことにした。アリックスには学生食堂もあり、3ユーロもあれば、それなりの食事ができるのだが、とにかく頑張ることにした。

キッチン以上に困ったのはトイレである。これは男女共用だし、トイレの鍵が壊れていて、扉をおさえていないと開いてしまうということもしばしばだ。シャワーだって、共同だから使用時間が限られる。

私が、見かねて「100ユーロはやめて、300ユーロの方に移ったら」と勧めると、「100ユー

ロの方でがんばる」というのである。100 ユーロの部屋で我慢して、貯めたお金で旅行するのだそうだ。K 君は、みかけは華奢で優男なのだが、精神がタフなのだ。

K 君に関して、私がもう一つ感心したのは、語学校のことである。K 君の通う学校は、大学付属なので、料金が安く、ここにも中国人学生が殺到する。フランス語のクラスは、気がつけば周りには中国人しかいない。中国人は、だいたい中国人同士で行動するから、授業が終わってもサッと帰ってしまい、K 君には話し相手もいない。去年の N 君と T 君は、こんな状況でも、日本人同士で助け合ったり、話もできただろうけれども、K 君は、たった一人なのである。

私は、さっそくリヨン大学で日本語を勉強しているフランス人に声をかけ、K 君のサポートを頼んだけど、K 君の言い草がふるっている。「ぼくは、かならず中国人と友達になってみせます。授業が終わったら、中国人と話をしたり、散歩をしたりしたいんです。」

なるほど、フランスに来て中国人と友達になるのか。そういえば、私にも留学時代に知り合った 40 年来の韓国人の友達がいる、などと反省したが、とにかく K 君はタフである。

「タフでなければ生きられない。優しくなければ生きている価値がない」というレイモン・チャンドラーの名せりふがあるが、専修大学にも、こういう「ハード・ボイルドな」学生がいるのだ。留学するということは、言葉や文化を身につけることだというけれど、こういうタフな精神に磨きをかけることでもあるのだと、あらためて思い知らされた。

1-2. 二人の古い友達

つぎに、リヨンであった二人の古い友達について話そう。

一人は、大学の 2 年先輩にあたる T さんである。彼女は、学部在籍中に、当時は唯一の留学機会であった産経新聞主催のコンクールに優勝して、一年間フランスに留学した。いまの専修大学生 N 君、T 君、K 君と同じキャリアなのだが、当時それが制度的に保証されていたのは、全国でただ一人だった。

彼女は、その後、当然のごとくフランス政府の給費留学にも合格し、リヨン第一大学で長く日本語を教えることになった。10 年ほど前に、専修大学がリヨン第二大学と協定を結ぼうとしたときに、そのネットワークを駆使し、難題を一つひとつ解決して、成功に導いてくれたのが彼女である。T さんの支援なしには、今日のリヨン第二大学と専修大学との国際交流はなかっただろう。

もう一人は、大学は違うけれど、フランス語の勉強仲間だった K さんである。彼は、当時、心理学を勉強しており、数年後に、やはりフランス政府の給費留学生となり、さらにフランス国立科学研究センター (CNRS) の研究者として受け入れられ、リヨン第一大学医学部で「夢」をテーマに研究を重ねてきた。

優等生のこの二人に、劣等性の私を加えた三人の共通の特徴は、とにかく「フランス語を勉強するのに苦労した」ということである。

1960年代後半から70年代初頭の日本の大学には、たしかにフランス語の授業はあったが、いずれもフランス語圏に留学生を送り出すシステムは皆無だった。

もちろんフランス政府は、フランス語やフランス文化を世界に普及させることには熱心で、東京などの大都会には日仏学院やアテネフランセなどという優れたフランス語教育機関があったから、フランス語を深く学びたいと思う者は、そこに通い詰めて技を磨くよりほかにない。何をおいても、大学の門を出て、武者修行の時代だったのだ。

私が、なぜこのような話をするかという、日本におけるフランス語教育の事情が、この後も長く変わらなかったからである。日本の大学が、国際交流活動に精をだすようになり、留学生の受け入れや送り出しに力をそそぐようになったのは、ようやく1990年代に入ってからである。

だから、私たち三人が経験した「大学教育に頼らず」「自分で考え」「他流試合で腕を磨く」という学習法は、現在、大学でフランス語を教えている大多数のスタッフに共有される経験ではないかと考えられる。

そしておそらく、こうした傾向は、フランス語のみにとどまらず、英語やドイツ語、スペイン語、ロシア語などのヨーロッパ言語はいうにおよばず、中国語、韓国語、インドネシア語などのアジア言語にも共通するにちがいない。

教えるスタッフの側は、好むと好まぬとにかかわらず、こうした過去の「トラウマ」を引きずっている。

ところが、学生たちの学ぶ状況は、大きく変化してきた。これは、冒頭に紹介した専修大学の三人の留学生を見ればよく分かる。とにかく外国語を学ぶことも、使うことも、留学することも「カジュアル」になってきたのである。外国語を学ぶ者と教える者、とくに教える者は、このジェネレーション・ギャップを、よく理解した上で教室に入らなければならない。

いったい何が、何故、どう変わったのか、そんな誰でも分かりそうなことが、外国語教育の現場では、十分に理解されていないと考える。

そこで、つぎに、フランス語教育をとりまく状況の変化を考えてみよう。キーワードは、とりあえず月並みな「世界化（グローバリゼーション）」「情報化」である。

2. 「外国語」をとりまく状況は、どう変わったのか？

2-1. 世界化あるいはグローバリゼーションのもたらした変化

20世紀の後半まで、私たちはしばしば「国際化」について語ってきた。ところが1990年代に入ると、「国際化」という言葉が一举に色あせて「グローバリゼーション」あるいは「世界化」という言葉にとってかわられることになる。「国際化」から「世界化」へのパラダイム変換が起こったのである。

私は、そこには2つの要因があると考えます。

2-1-1. 市場の一元化

一つは、20世紀の終わりにベルリンの壁が崩壊して、資本主義と社会主義という2つの異なる経済システムの隔壁がなくなり、市場が一元化されたことである。

この時点で、もっとも素早く行動を開始したのはヨーロッパ諸国だった。彼らは、ベルリンの壁崩壊を受けて、1992年にEC（欧州共同体）を発展的に組み替え、EU（欧州連合）に衣がえすると、次々と国境の壁を越え、2004年以降、旧東欧圏の国々を次々と加えて、参加国を27カ国とした。現在は、さらなる政治統合をめざしてEU憲法の批准を目指しているが、すでに1999年に欧州中央銀行の管理する単一通貨ユーロ導入を決定し、2002年2月28日に旧通貨の流通を終了している。

この年の2月にリヨン大学で集中講義を担当していた私は、偶然、この歴史的な瞬間を現地体験した。移行は、予想以上にスムーズに行われ、大きな混乱は見られなかった。しかし、これによって何が変わったというのだろうか？

たとえば、3月の中旬に予定通り講義を終えて、リヨンからアムステルダムに向かった私のポケットには、フランスで使い残したコインが何枚か残っていた。私は、広いアムステルダムの空港でハンバーガーショップに入り、そのコインを使って昼食を済ませることができた。

これは、一見何でもないことのようにだが、とても大きな変化である。ヨーロッパ圏内に住む人も、旅行する人も、国境を越えるときにパスポートを見せる必要がないだけでなく、フランをギルダーに両替をする必要もなくなったのである。私は、その時、フランスの友人が言った「財布が一つになれば、人々はその便利さに気がついて、いやでも統合を加速させる」という言葉を思い出した。その後、EU圏内で起こったことは、それをよく示している。

それまで、誰もが絶対だと考えていた「フランスの鉄鋼会社」「フランスの銀行」「フランスの自動車会社」が、次々と統合合併で姿を変え、技術協力のネットワークを進め、「ヨーロッパの鉄鋼会社」「ヨーロッパの銀行」「ヨーロッパの自動車会社」に変身している。そうしないと競争に勝てない時代が訪れたのだ。

2-1-2. エラスムス＝ソクラテス・プログラムの登場

こうした市場の流れに対応するために、EU はすでに EC 時代の 1985 年にエラスムス計画という学生交流プログラムを立ち上げた。これは、拡大するヨーロッパ圏の多様な文化と多様な言語を現地で学ぶ学生を支援し、国境を越えてヨーロッパ全域で働くことのできる人材を養成し、人々の間に国籍を超えて「ヨーロッパ市民」としての自覚をもつことを促すための教育プログラムである。

1995 年には、学生だけではなく教育者も交換するソクラテス計画が開始され、エラスムス計画はその一部となった。この計画は、21 世紀に入りソクラテス II 計画として強化され、2004 年からは、さらにヨーロッパという枠組みを超えたソクラテス・ワールドという計画もスタートしている。

このプログラムは、ヨーロッパ域内で学ぶ学生の留学を支援して、4 年間の大学生活のうち 1 年間で自国以外の大学で過ごし、出身大学で学んだ 3 年とあわせて 4 年で卒業する制度を作り、受け入れた外国人学生が言語を学ぶための施設を増強し、教育スタッフを整備することを主な目的としている。

たとえばフランスにフィンランドの学生が留学した場合を例にとろう。フランスの大学は、まずフィンランド人学生のために学生寮を準備し、フランス語学習を支援する。そして大学の授業の内容をフィンランド人にも理解できるように工夫して、フィンランド人学生に「フィンランド人としての学習能力」があれば、フランスの大学の単位が取れるように支援する。

これは、いままで「フランスの大学で勉強するなら、あらかじめフランス語は自分の責任で勉強して、十分なフランス語能力をもって留学しなさい」という自己責任論を堅持していたフランスの大学にとっては、大改革だった。

この改革は、アジアからの学生への対応にも波及する。

ここ数年、リヨン大学側は、専修大学の留学生に対しても、エラスムス・プログラムにならった措置をとりはじめ、「フランス語学習を半年で切り上げ、後半の 6 ヶ月は一般学生にまじって大学の通常授業に参加すること」を強く要請するようになった。リヨン大学に「フランス語学習だけを目的とする学生」を受け入れる特別枠がなくなってしまったのである。

その代わり、日本からの大学生に対しても、EU 域内の留学生に対するのと同じようなサービスを提供し、留学生に学ぶ意欲と能力があれば、単位を取得できるよう、細かい配慮を行うこととしたのである。

2-1-3. 1969 年の「手づくり留学」との質的な変化

いまでこそ「あたりまえ」になってしまったこの変化の激しさを、私の貧しい経験に照らして考えてみよう。

私は40年以上前の1969年9月、ベルギー政府給費留学生として渡白し、ルーヴアン大学文学部で学生生活をはじめたが、その年の学期初めに、ロマン語文献学科の研究室に出向いたときのことを鮮明に記憶している。主任教授のプーイヤール先生が、私にまず尋ねたことは、「君は、修士課程2年に在籍しているそうだが、修士課程とは何か」ということだった。当時のルーヴアン大学には、「修士課程」なるものは存在せず、学部を終えれば、直ちに博士課程となった。私の説明を聞いた後、先生方はしばらく話し合っ、「君は、到着したばかりだし、まだ言葉も不十分だから、学部の4年生から始めなさい」ということだった。

さらにその後、何度か、プーイヤール先生と話し合ううちに、私のフランス語能力に不安を抱いた先生は、とうとう私を学部2年からスタートさせることにしてしまった。

こうして私は、年下のベルギー人学生と机をならべて授業を聞き、ノートをとり、期末試験を受け、合格発表の結果にどきまぎしながら、3年間の留学生契約期間をまっとうした。

そしてブリュッセルの文部省にお礼の挨拶に行った私に、留学生担当官が「君は、あと3年間、博士課程で勉強してみないか」という、今では考えられない提案をしたのである。

博士課程に入れば、授業などに出席する義務はない。毎年、年度始めにプーイヤール先生と研究計画を話し合い、年度末に文部省に出向いて簡単な報告をすればよいという気楽な身分である。

おかげで私は、6年もの間、政府給費をいただいて気ままな学生生活を送ってしまった。

こういう「いい加減なこと」は、現在ではありえない。ベルギーであれ、フランスであれ、留学先の大学には国際交流の部局があり、互いの国の教育制度を比較し、受け入れ学生の取得済み単位の換算をして、当該学生の言語能力の如何にかかわらず、しかるべき学部学科に登録させてしまう。

「国際化」から「世界化」へと時代が変化し、互いに交換する留学生の数が桁違いに増加するにしたがって、留学生受け入れの制度とマニュアルが確立してきたのだ。

こうした状況の変化は、当然といえば当然のことなのだが、そのメリットとデメリットは、経験してみないとなかなか理解できないし、体の中に埋め込まれてしまった「古い傷のような」語学学習や留学体験からは、容易に自由にはなれない。

2-2. 情報ネットワークの拡大

フランス語教育に変化をもたらした、もう一つの要因は「情報化」、すなわち情報ネットワークの拡大である。

誰もが、日々体験しているように、パーソナルコンピュータの発達とインターネット網の整備によって、それまで大きな障害であった国境や言語の壁を越えて、国家や企業や個人に関する

る情報が、以前には想像もつかなかったようなスピードで交換されるようになった。情報の交換を助けるソフトウェアやインフラストラクチャーの開発によって、これまでは限られたエリートだけに独占されていた情報が、誰にでも簡単に、しかもローコストで手に入れることができるようになったのである。

もちろん、20世紀の間にも、郵便や電話やファックスが存在し、誰にでも利用できる公平な情報交換手段を提供していた。

新聞やテレビといった身近なメディアも、21世紀の今日にいたるまで、たいへん便利で、誰にでも役立つ、多言語的で便利なツールとして立派に役割を果たし続けている。

こうした情報通信ネットワークの整備や利用は、なにも今に始まったことではない。

たとえば、新聞の場合は、ポール・ジュリアス・ロイターがすでに1851年には英仏海峡の海底ケーブルを利用して英仏間の金融情報などを流していたから、19世紀の半ばには、国際間の情報が迅速に、安価なコストで交換されていたことになる。また、ロンドンのコーヒーハウスでは、そのずっと以前から、誰でも世界各国の新聞を読むことができた。

とくに外国語を読んだり、聞き分けたりできる人たちは、かなりのスピードで世界各地の必要な情報を入手することができたが、外国語を理解しない場合でも、わずかな時間の遅れを覚悟すれば、外国にいても自国語の新聞はなんとか手に入るし、短波放送などを利用すれば、自国の放送を聞くチャンスもある。とくにテレビの場合には、多言語放送も可能だし、衛星放送やケーブルテレビを利用すれば、外国にいてもかなりの範囲で自国の放送を聞くことができる。

しかし、この便利な新聞、ラジオ、テレビには、共通した弱点がある。

それは、新聞社、ラジオ局、テレビ局という巨大な組織が、組織の決定に従って、一方的に情報を取捨選択して発信しているということである。情報の受け手である私たちは、もちろん新聞を選んだり、チャンネルを切り替えたりして、好きな新聞や番組を選択しているが、そこには限界がある。情報の発信に、莫大なコストがかかるのがネックになっているのだ。情報は、よく整理されているが、パッケージごとに完結し、閉ざされている。

これに対してコンピュータは、情報を自由に発信し、自由に受信する、開かれたシステムである。

しかも、既存の新聞、ラジオ、テレビ、出版のような巨大メディアを上手に利用して、自由に組み合わせ、個人の日常的な経験や思索を加えてホームページやブログやメールの形で発信することも可能である。

また、新聞、ラジオ、テレビのようなマスメディアに頼らなくても、世界中の経済危機や株情報や商品取引の情報を集めて、ネットを利用した株や商品のビジネスを行うこともできる。

時には、セカンドライフのような仮想空間に投資して、日常とはまったく違う生活をおくり、

地球の裏側のブラジル人とカフェでトランプやサッカーゲームを楽しむこともできる。

21世紀を迎えるまでは、このように開かれた可能性をもつコンピュータにも、もちろんさまざまな障碍や制約や限界があった。

たとえば通信のスピードである。20世紀末まで、個人用のコンピュータの多くは、電話回線を使って通信を行っていたから、音声や映像の交換が難しかった。しかしブロードバンドの時代に入って、この問題はほぼ解消されつつある。

また、ネット上にあふれる膨大な情報の処理を、いかに効率よく整理し、自分に都合の良い情報だけを取り出すかという課題もあった。しかし、これも Google を初めとする検索エンジンの驚異的な進化で、かなりの部分が解決されつつある。近い将来には、世界中の国立図書館の図書を、自宅のコンピュータで検索し、必要な文書をダウンロードして利用することすら実現しそうな勢いである。

そうすると最後に残される問題は、言葉ということになるだろう。

コンピュータのもっとも優れた特性は、瞬時に国境を越えることにある。しかし20世紀末までは、言語の壁がかなり強烈で、たとえばインターネットでフランス語のサイトにたどりついても、文字化けして読めない言葉が頻発するといった場面に遭遇した。

自分で作成したホームページにフランス語版や中国語版を付け加えようと思っても、日本で発売されているホームページ作成ソフトでは、フランス語や中国語が使用できないとか、もっとひどいのは、日本仕様のメールソフトを使うとフランス語の綴字記号が使用できないとか、とにかく不自由だった。

そうした中で、英語のインフラだけが加速度的に進化し、私は「このままコンピュータが普及すると、英語以外の外国語は駆逐される」と本気で危惧したものだ。

しかし実際にコンピュータが普及してみると、この問題は私の予想とはまったく逆の方向を歩み始めた。21世紀に入って、マイクロソフトにかぎらず OS の開発者が、一番大きな関心を寄せている問題の一つは、その多言語化であろう。たとえば、インドのような数多くの言語を抱えた大国では、たとえ共通語が英語であっても、たくさんの言語が支障なく利用できなければ、コンピュータは普及しない。英語による世界制覇ではなく、多言語化による世界市場の制覇が、コンピュータ開発者の課題になったのである。

2-3. 言語の壁をどう越えるか

しかし、それにしても言葉は大きな壁である。

たしかに、世界中のあらゆる言葉は、いくつかのシンプルな規則の組み合わせによって構成され、誰にでも簡単に解読可能なはずなのだ。しかし、いかんせん言葉の種類が多く、その解

読コードに習熟するには時間がかかる。

このやっかいな壁を、子供の頃読んだ「ドラえもん」の主人公の野比のび太のように、食べるだけで外国語が話せてわかる「ほんやくコンニャク」のような道具を手に入れて、気楽に乗り越えることはできないだろうか？

私は、この途方もない願いも、21世紀の今日、部分的には叶いつつあると考えている。

とくに日本語と韓国語、フランス語と英語のように語彙や文法構造に共通性の多い言語の間では、ある程度は実用の役にたつ段階に達しつつある。

具体的な例を2つ挙げてみよう。

まず、日本語と韓国語の間で、実際に私が行っている学会活動の話である。

学会は比較民俗学会といい、現在は韓国慶尚北道安東市に事務局が置かれている。比較民俗学会は韓国の会員が400名、日本の会員が40名くらいである。インターネットのホームページとメールを利用して韓国事務局と連絡を取り、日本在住の会員に学会ニュースを流すのが私の仕事だが、おそらく日本在住会員のなかで私が一番韓国語の知識のレベルが低いと思う。私は1988年のソウル滞在以来、韓国語との付き合いは長いが、まったくの独学なので、おそらく専修大学で一年間、韓国語初級の授業を受けた学生と同じくらいの実力だと思う。

こんなに運用能力のない私が、なぜ事務局のような煩瑣な仕事を引き受け、連絡係をしているかといえば、それは一重にコンピュータ上の翻訳ソフトのおかげである。

韓国事務局との情報交換は、基本的にメールですませている。韓国語で受け取った情報は、ただちに翻訳ソフトを利用して解読できる。韓国からのメールに対して、日本語で返信を用意し、これを翻訳ソフトで韓国語になおして、メールにコピーして送信する。それだけの手間である。たとえば、「日本事務局の樋口です。2008年春期学会に関して日本在住会員に案内を発送したいと思います。開催の日時と場所とテーマをお知らせください。よろしくお願いします」という簡単なメールを打つ場合は、ソフトに入力して翻訳というボタンをクリックする。

すると「일본 사무국의 히구치입니다. 2008년 봄기 학회에 관해서 일본 거주 회원에 안내를 발송하고 싶습니다. 개최의 일시와 장소와 테마를 알려주세요. 잘 부탁드립니다。」という韓国語とともに、「日本事務局のヒグチです。2008年ボムギ学会について日本居住会員に案内を発送したいです。開催の日時と場所とテーマをお知らせ下さい。よろしくお願いいたします。」という日本語の確認翻訳があらわれる。

この翻訳ソフトの古いバージョンでは、日本語の確認翻訳がなかったので、かなり不安だったが、進化したこのバージョンでは、安心していられる。

この翻訳で唯一問題になるのは、「ボムギ学会」という表現くらいだろう。韓国文の「봄기」が春期であることは、初心者でも分かるが、どうしても必要な時には電子辞書などの世話にな

ればよい。

韓国語の翻訳ソフトは、少しコツを学べば、実に忠実な訳をしてくれる。もちろん、文章構造が複雑になると誤りが多くなるから、なるべく単純な文章構造を選ぶ。また目上の人に手紙を書く場合には、敬語と話し言葉が混在してしまっていて、どうしても手のつけようがない場合もある。そういう時は、お詫びを一言いれて許してもらうことにしている。

私は、この数年、同じ翻訳ソフトを使用してパワーポイントを作成し、年に2回の学会発表もこなしてきた。確かに、表現は稚拙で、人前で披露するには恥じ多いことだが、よく準備すれば、少なくとも同時通訳よりは、危険性が少なく、正確に情報を伝えることができる。そして何よりも、「アジアの食文化」「民間信仰」「芸能」「住まい」などという身近なテーマで話し合う機会に、400名の韓国研究者たちに「日本の場合はこうだ」という基本的な情報を、言葉の障害を越えて伝えることができることは、悪いことではないと考えている。

次に、市販の翻訳ソフトよりも、もっと手軽な Google の言語ツールを利用して、フランス語と英語の場合を考えてみよう。

まず素材とするのは、プロヴァンスに住む友人からのクリスマス・メールである。

Chers amis Avec une image de Rousset ce jour 25 décembre, nous vous souhaitons de joyeuses fêtes de Noël et de fin d'année. Ici c'est très calme tous les quatre. Amitiés.

Marie-José et Pierre Des baisers aux enfants. Le père Noël est-il passé ?

念のために日本語の大意を添えるが、「本日 12 月 25 日のルーセ (町の名) の写真に添えて、みなさんのクリスマスと年末のご多幸をお祈りします。こちらは、4 人とも、平穩に暮らしています。友情をこめて。マリ=ジョゼ、ピエール。子供たちにキッスを送ります。サンタクロースは来ましたか？」という程度の簡単な手紙である。この手紙をくれたマリ=ジョゼは、いつも短いけれど気の利いた手紙をくれるので、我が家では「便利なフランス語の先生」として珍重されている。

これをグーグルで英語に変換してみよう。

まず、グーグルを開き、トップページ右端の「検索オプション」「表示設定」「言語ツール」のうちから、「言語ツール」をクリックする。

つぎに、コピーした紙の本文を、「テキスト翻訳」の欄に貼り付ける。そして、下部の言語の選択欄の言語をフランス語から英語に設定し、「翻訳」のボタンをクリックする。

そうすると、「**Dear friends With an image Rousset date December 25, we wish you a merry Christmas and New Year. Here it is very quiet all four. Friendships. Marie-José and Peter Kisses to the children. Father Christmas has happened?**」という翻訳が実行される。

この英文は、Pierre を Peter にしてしまうところはお愛嬌だが、かなり良く分かる。

最後の「Father Christmas has happened?」というのは、大いに変だが、これもなんとか理解できる範囲である。

これをちなみに「フランス語→日本語」に設定して「翻訳」ボタンを押すと、「親愛なる友人 イメージ Rousset の日 12 月 25 日で、私たちは、クリスマスと新年の陽気ください。ここでは、非常にすべての 4 つは静かだ。友情。マリージョゼとピーター 子供たちにキス。父のクリスマス起こったのか?」になって、かなり変だ。やはり、英語とフランス語の親密さにはかなわない。

ここでは、まずフランス語から英語への変換例をあげてみたが、ほとんど同じことが英語からフランス語への変換の場合にもおこる。たとえば、リヨン大学東アジア研究所が 2009 年 9 月に発行した「ニューズレター」の冒頭の挨拶は、以下のように始まる

「Dear all, Last semester, the Lyons Institute of East Asian Studies (IAO) outlined new academic objectives for the next four years. These new objectives will unfold in a significantly changed context at the regional, national and international levels.」

これを、「英語→フランス語」の変換にかけると、かなり正確なフランス語が得られる。

「Chers tous, le semestre dernier, l'Institut d'études de Lyon d'Asie orientale (IAO) a défini de nouveaux objectifs du programme scolaire pour les quatre prochaines années. Ces nouveaux objectifs se déroulera dans un contexte profondément modifié au niveau régional, national et international.」

ここで問題になるのは、Institut d'Asie Orientale (IAO) の名称くらいのものだろう。

つまり、高校卒業程度の英語ができて、大学で初級のフランス語を学び、辞書の引き方や文法を身につければ、フランス人の友人とクリスマス・メッセージの交換くらいはできるし、もう少しがんばれば、フランスの取引相手にビジネスレターを送って、かなり込み入った話ができるということだ。

3. 大学は何を教え、何を学ぶところなのか

3-1. 一万時間ルールとスキー教室

2009 年の年の瀬をひかえた或る研究会で、同僚の T さんが面白い話をしていた。

家具職人でも、金銀細工師でも、一人前のよい箆笥や指輪をつくるまでには、だいたい一万時間の修行が必要なのだそうである。一年 300 日、一日 8 時間働いて、ほぼ 4 年ということか。長いといえば長いし、短いといえば短い。

しかし、このルールを外国語の学習にあてはめたら大変だ。かくいう私は、2010 年 1 月末

には 64 歳を迎える。18 歳で大学に入学してフランス語を始めたのだから、もう 46 年もこの言葉に付き合っていることになり、おそらくこのルールには当てはまることだろう。また、私のような年寄りを例に引かなくても、大学で語学教育に携わるスタッフの大半は、このルールをクリアしているに違いない。

しかし、たとえば今年大学で新しい外国語を学び始めた学生は、そうはいかない。一年で 90 時間、多い学生で 135 時間の授業を受けただけなのである。こんな「中途半端な」外国語の学習が、なんの役に立つのかという疑問が、いつもつきまとう。

こんな時、いつも私の胸をよぎるのは、かつて経験したスキー教室の記憶である。

私は、生涯でたった一度だけスキーをしたことがある。一緒に旅行していた友人に誘われて、宿泊先の民宿でスキーの道具一式を借りて、朝スキー場まで担いで行き、スキー教室に参加した。最初は、立つことすらできなかったが、道具の扱い方から、滑り方、転び方など、つぎつぎに教わって、グレンデに出てすべり、夕方はスキーに乗ったまま宿の玄関までたどりついた。

大学での外国語の学習の場合には、こうした「手軽な達成感」が、ほとんど皆無である。

スキーと外国語は、どこが違うのか？

言うまでもないことだが、スキーにだって一万時間ルールはある。オリンピックの代表のようなスーパー・スターにならなくたって、好きなように野山をすべり歩いたり、急な斜面を滑降するためにだって、一万時間くらいの「学習」は必要だろう。

その反対に、外国語にだって、本当は「手軽な達成感」があるはずだ。

たとえば、ハングルを 8 時間勉強して、ソウルの町にいてみよう。

地下鉄の駅の名前や、レストランのメニューが読める。それまで「悪魔のようだった」あの〇と棒を組み合わせた文字が、忽然と意味をもって現出するのである。世界は、それまでの混沌から秩序をもった姿を現し、語りかけてくるのだ。

スキーの技術も外国語の知識も、雪原とか外国の町とか、「それまで無縁であった世界に参入することを可能にする」という意味では、同じである。

それでは、問題はどこにあるのか？私は、それが、大学というシステムにあると考える。大学は、気難しくて、なかなかスキー教室のような「手軽な達成感」を与えてくれないのである。

どうして、そういうことになってしまうのか。

3-2. 専門か、教養か、実用か、スキルか？

そこで、もう一度、私が教師生活をはじめた 1975 年にタイムスリップしてみよう。まだパーソナル・コンピュータはおろかウォークマンすらなく、ラジカセが全盛だったが、大学の片隅には LL 教室が生まれつつあった時代である。この LL 教室をめぐる、外国語教育担当スタッ

フのあいだで論争がおこった。

当時の外国語教育担当スタッフは、ほとんど全てが文学部出身者で、文学作品や人文科学のテキストを読み解くことを専門としていたし、外国からの情報は、書籍や新聞のような紙媒体のものが圧倒的で、文字情報を解読することが、主流だったのである。

もちろんFENのような英語放送もあったし、時には大学を訪れる外国人もいたので、通訳も必要だったが、外国語の音情報を解読し、日本語を介さずに外国語のままで当該情報を処理するという仕事は、特殊な職業であり、大学の授業で扱う必要がないというのが、大方の見方だったのがある。

そこにLL教室というヘンテコリンなスペースが生まれたのだから、論争が起こっても無理はない。LL教育を重視する人たちは、「経済学部の学生にヘミングウェイだのスタインベックだのを読ませてなんになる」というし、LL反対派の人たちは、ヘミングウェイも読めないような学生に、英語の音だけ聞かせてなんになる」という。

この論争は、結局、外国語教育は「教養」なのか「実用」なのか、という一見分かりやすい二項対立に整理されてしまった。確かに文字情報が、圧倒的だった時代には、正確にそれを読み解く力が基本になる。そのうえ、文字の情報は、パピルスや粘土板の時代から、何千年も堆積しているから、これを解読することこそが、文化であり、教養であると言えるだろう。

しかし、特別な場合をのぞけば、人は筆談で話し合うことはない。人間が顔をあわせたり、電話の受話器をとれば、音を介して情報を交換するのだから、それができなければコミュニケーションに支障をきたすことは明らかである。

コンピュータの普及とともに、紙媒体の文字情報の優位が崩れ、グローバリゼーションの進行にしたがって、世界中の情報が音と文字の双方を通じて、怒涛のごとく押し寄せてくる現在、かつての「教養」か「実用」かの論争は、ほとんど無意味になったといつてよい。外国語に関しては「読み・書き・聞き・話す」能力がバランスよく備わっていることが最善であることは、決まっている。

時間軸の上に堆積された情報も貴重だが、空間上にばら撒かれた同時代の情報も大切である。長年にわたって積み重ねられた情報を読み解く「教養」は、同時代に拡散する現在の情報を理解するうえで欠かせない。つまり「教養」は「実用」にとって不可欠だし、実用的でない教養など存在しない。

タイムスリップした時間を現在にもどそう。現在では、「教養」と「実用」という見せかけの二項対立は姿を潜めたが、かわって横行しているのが「専門科目」と「スキル科目」という新しい2項対立である。

現在のように、大学が学部と学科に分かれ、それぞれが法学とか経済学とかいう旗印のもと

に専門科目群を用意している状況のもとでは、外国語専攻の学部や学科のない大学の場合には、外国語教育は専門科目に奉仕するスキル科目と位置づけられてもしかたがない。

しかし、それでは「専門」と「スキル」との違いは、どこにあるのだろうか。

たとえば、法学部でEU法を専攻する学生の場合を考えてみよう。20世紀の後半に誕生し、現在も細部にわたって厳しい議論の交わされているこの領域を学ぶ学部学生のためには、すでに日本語で書かれた概説書もあるだろうし、優れた日本人研究者の論文もあるから基本的な情報の整理は日本語だけで大丈夫だろうが、フランス語かドイツ語を知っていれば、現在進行形の情報の量は倍増する。

コンピュータでGoogleのような検索サイトにキーワードを放り込んでやれば、新聞記事やテレビ放送やブログなどの情報が、山のように飛び込んでくる。フランス語版やドイツ語版のウィキペディアや新聞、雑誌サイトの助けを借りれば、新しい情報をかなりの精度で取り込むことができる。

その意味で、EU法を学ぶ学生にとっては、フランス語やドイツ語は、身につけることが望ましい「スキル」である。

しかし、そもそもEU法を学ぶことには、どんな意味があるのか。そこには、まず、新しく生まれつつあるヨーロッパ共同体の活動を法律という視点から理解するという成果が期待される。また、ヨーロッパで一番新しい法律の体系を学ぶことで、ローマ法以来のヨーロッパの法体系の歴史や文化を改めて見直す視点を手に入れることができるかもしれない。さらには、日本とアジアに目を向けて、来るべき東アジア共同体の可能性と問題点を推し量る視点も期待できる。EUにも、EU法にも門外漢の私が推測できるのは、この程度だが、この種の答えはいくら集めてみても、結局は、学ぶ者に「世界に関する情報を正確に把握させ、正確に表現させる」ということに還元されてしまうだろう。

要するに、学ぶということは、世界を理解するための、自分なりの「スキル」を手に入れることに他ならない。言葉の学習は、その「スキル」の「スキル」であり、もっとも基本的な、汎用性の高い「スキル」なのである。

それでは、大学で言葉を学ぶ学生、とくに「大学で初めて出会う外国語」を学ぶ学生たちには、どうすれば「スキル」を伝授し、「役に立つ」という「達成感」を与えることができるのだろうか。

私は、「そのスキルがどのように出来上がっているのか」という言葉の構造を示すことが、一番大切だと考えている。

3-3. 言葉と世界の構造を伝えること

フランス語であれ、スペイン語であれ、大学で「第二外国語」と呼ばれる「初めて出会う外国語」を学ぶ学生は、初級文法とか初級構造などという科目を履修する。これは、わずか 30 回ほど、時間にして 45 時間の授業にすぎない。しかし、学ぶ者の心がけ一つでは、未知の世界を開く「スキル」を手に入れることができるかもしれない可能性にあふれている。

もちろん、初級文法あるいは初級構造の授業には、なにか特別な仕掛けがあるわけではない。ごくありふれた、場合によっては退屈な授業ですらある。

たとえばフランス語の場合、まず最初に、音韻の構造が詳しく説明されるだろう。日本語にない音や、日本語にあるのにフランス語にはない音の発音の練習。かなり退屈である。しかし、その限られた数の音の組み合わせが、無限の言葉を生み出す。音のシステムの構成要素は数少ないのに、つむぎだされる言葉は数え切れない。さらにこの言葉が組み合わされて出来上がるメッセージは無限である。

次に、フランス語の統辞体系が少しずつ説明される。例の S + V、S + V + A、S + V + O などという文型のことである。

そこでは、S という主体の「世界との関係」が解き明かされる。主体とその存在のあり方をつないでしまう être という恐ろしい動詞や、主体がなにかを所有してしまうというという、もっと恐ろしい動詞 avoir のことが、こともなげに語られる。そのうちに、言葉が、ある限られた数の規則で結び合わされて、主体と世界との関係をすべて説明し尽くそうと迷走し始める。

学期の最後には、これまでの授業を整理する意味で、フランス語の時制と法について説明されるだろう。時制とは、いうまでもなく時のシステムのことだ。私が生きているこの世界は、このシステムのおかげで現在と過去と未来に分節される。言葉がなかったら、私たちはどうして現在・過去・未来を整理して生活できるだろうか。

この時制とともに、フランス語には、直説法、条件法、接続法、命令法という 4 つの法（モード）がある。いずれも語る主体の世界への姿勢を示すものだ。現実を客観的に述べようとするのか、非現実的な願望や、期待を述べるのか、果てまた世界に号令しようとしているのか、語りモードはさまざまだが、それぞれが主体の世界に対する働きかけの形を示している。

初級構造あるいは初級文法の授業は、わずか一年間、最大 45 時間の授業の中で、言葉で世界を理解したり、世界に働きかけたりするとは、どういうことなのかを伝える。

もちろん、世界のあり方や、そこに参入するスキルを教えるのは、言葉の学習だけではない。物理学でも医学でも、地理学でも歴史学でもよいはずである。しかし、現象の背後に隠れた構造の存在を開示しようとする時に、言葉はもっとも身近な存在であり、誰もが短時間で理解できる、かなり恵まれた素材であると思う。

そして大学で学び始めた学生が、あふれる情報の中から意味ある情報（仮にこれを **information pertinente** と呼んでみよう）を見極め、世界の意味を読み解こうとした時に、例えばフランス語という外国語の構造を学ぶことは、かなり役に立つはずである。

限られた数のDNAが、地球上の数え切れない生き物を創っているように、言葉は無数のメッセージを生み出している。

ネット上にあふれる無数のメッセージを解読するためにも、そのメッセージが限られた数の構成要素が、限られた数のルールに従って組み合わせられることによって出来上がっていることを知る必要がある。初級構造の 45 時間の授業は、こうした情報解読と固有のメッセージ発信のための「スキル」を学ぶ上でスキー教室のレッスンと同じような効果があると思う。

本稿は、平成 19 年度の専修大学研究助成の成果の一部である。